＜春季講演会＞
「倭鏡研究の現在」

報告　３年　岸　なつみ

平成２８年度春季講演会は、去る６月４日（土）「倭鏡研究の現在」と題し、川崎市市民ミュージアム学芸員の新井悟先生を講師に迎えご講演いただいた。

講演は３つの項目に分けられ１.倭鏡の概要２.倭鏡研究史３.今後の研究について発表が行われた。

まずはじめに、鏡と倭鏡の概要について説明がされた。鏡に使用される材質は金属が一般的であるが、トルコ等では黒曜石で作られた石の鏡もある。ヨーロッパでは水面に自分の顔が映る水鏡が一般的に使用されていたが、中国では青銅の鏡が使用されていた。

また、鏡の形状はどの国でも円形であるが、ヨーロッパでは円形の鏡に柄が付いているタイプが一般的で、まれに足が付いているタイプもある。中国では、柄がついていない円形タイプの鏡が基本形として使用されていた。紀元前４世紀、中国では道具以外の価値が見出され、鏡のヒビやくもり方等で自分の過去・未来の関係を占うという呪術的な価値が生まれる。日本には弥生時代頃から中国より鏡が輸入されており、日本でも鏡の呪術的価値は発展していった。中国の三国時代以降継続的に輸入されていて、日本人が鏡に特別な意味を持たせていた事がわかる。

のちに日本で作られる倭鏡とは、古墳時代に中国鏡を模倣して作成された鏡を指す。倭鏡は中国鏡の図像を模倣しているが、初期の８０年の間で徐々に図形化されていった。しかし、数は少ないが日本独自の文様も発展を見せて、家屋紋や直弧紋などの文様表現があらわれる。家屋紋は当時の建物である竪穴住居・入母屋倉庫・切妻式倉庫・２階建ての入母屋の４つが見られる。今は見ることが出来ない当時の珍しい建物を確認することができる。また、倭鏡の縁に鈴がつけられた日本独自のタイプでもある。しかし、このタイプは偽物が多く、現存するうちの４割は近代に製作されたものとされる。これらの倭鏡の多くは高錫合金の鏡で、化学分析を行ってみると銅８０％強、錫２０％強、その他数％でつくられていたことが分かった。初期の倭鏡は鋳損じがない等中国の鏡に劣らないほどの鋳造技術で制作されていたことが分かっているが、現代でもこの配合の鏡を作成させるのは困難であり古代人の技術の高さがうかがえる。

初期の倭鏡は中国鏡と比べ大型である。これは大きい鏡ほど神に伝わる力が強いと考えられたからではないかとされる。これらの倭鏡はヤマト政権が地方豪族に与えたもので有力な豪族ほど大きな鏡が与えられた。これは格差の象徴でもあり、また、神とつながる能力＝呪術的な要素を鏡が持っていたためである。

倭鏡の研究は明治の中頃にはじめられた。倭鏡研究の第一人者である八木奘三郎氏は、中国鏡の影響を受けていない日本独自の鏡が刻まれた「和鏡」が存在するという仮説を立てた。八木の「和鏡説」は国学的な発想から生まれたものだが、日本独自の「和鏡」は見つからず研究は暗礁に乗り上げた。

その後、富岡謙三氏と後藤守一氏がそれぞれ説をとなえ倭鏡研究の認識を深めた。富岡氏は日本の鋳造技術は優れているが文様が崩れていることを指摘し、中国鏡に比べ日本人は知的でないから模倣がうまくいかないのではないかという考えを示した。後藤守一は倭鏡には積極的なものがないとし、その考えは戦後まで続いた。

戦後、田中琢氏が「倭鏡」という言葉を初めて使用した。「倭鏡」は中国の模倣から始まり、やがて独特の様相を持つ世界を作り上げた。中国鏡は姿見であり化粧道具であったが、倭鏡は呪具祭具としての特質が付与され政治と祭儀のなかで呪力を発揮していったとされた。

２０世紀後半になると倭鏡の研究にインパクトを与えた研究が２つある。１つ目が１９８４年に除怦芳氏が発表した『三国両晋南北朝的銅鏡』である。日本が輸入した銅鏡には、北方の魏・西晋の国から邪馬台国が輸入した方格鏡・内行花文鏡・獣首鏡、南方からは輸入した各種神獣鏡・各種画像鏡がある。しかし、４～５世紀にかけて中国の北方は五胡十六国が乱立する混乱状態にあり、銅鏡の鋳造が停滞していた。さらに６世紀になると中国全土で銅鏡鋳造業が衰退した。このことから、三角縁神獣鏡は中国に存在せず呉の職人が日本に渡り製作したのではないかとした。また、衰退した時期の図像が崩れているのは中国にも見られる。このことにより、すべての鏡の研究が見直された。

２つ目が三角縁神獣鏡の製作地についてである。三角縁神獣鏡は日本でしか見られない。そのことから、①型式学的方法②製作技術的方法③分布論的方法という３つのアプローチと、「A.鏡と倭鏡、両方ある。」「B.すべての鏡は日本で製作された。」「C.すべての鏡は中国で製作された。」という３つの学説が示された。

これに対し、新井先生は除怦芳氏の学説より三角縁神獣鏡はすべて中国製ではないか考えている。このように、倭鏡の研究は見直され始めており、図像の変化は一連の変化をたどっていることが示された。

一方、奈良県下池山古墳で出土した初期の倭鏡は、初期倭鏡観を大転換させる発見でもあった。この鏡は日本で製作された物であると考えられている。鏡自体の技術は高いが文様が崩れている。これらの技術はどのように日本に入ってきたのか分かっていないが日本側から技術を得るため留学生を送ったか、中国側から技術者が渡り伝えたかのどちらかではないかとされる。

最後に、今後は①ふたつの機能論②可視論③非可視論の研究が必要であるとした。

また、倭鏡には装飾品としての価値があったのではないかとの考えが示され、今後の研究がまたれるとした。

講演終了後、質疑応答が行われ活発な意見が交わされた。

（２２８０文字）